

お薬のさじ加減

内科の僕に相談することとなったというのが経緯だ。

お話を伺うと、これまでも市販の風邪薬を使っても、具合が悪くなつて



とつて今回が心理面に作用する薬で対処しなくてはならない最初の経験であり、抗不安薬に必ず伴

ことにした。半分の半分の半分である。彼女も変な使い方の提案にちよつとびっくりしていた。

乳幼児の用量であることも説明し、試してみることにした。その次来ていただいた時に半分半分が増やした。さらに作用時間が長いことを利用し、服薬を一日ごとにするように調節した。何度か試すと症状がある程度抑え、筋弛緩作用が出にくい彼女に納得してもらえ、至適な用量を見つけたことができたように思えた。

う筋弛緩作用を副作用として違和感を持つていることが分かった。目的の作用と望んでいない作用の調節が課題だ。

僕は同効の薬剤の中から、動物実験でも臨床試験でも筋弛緩作用が抑えられた特性が出ている薬を選び、用量を通常使用量の8分の1で開始する

依頼してくれた仲間にもプロセスを伝え、以降彼女に継続してもらうことにした。最後の診察の時に「今まで薬は嫌いでしたが、自分に合う使い方を工夫すればいいんですね」と彼女からコメントをもらった。僕はちよつとうれしかった。

(三愛病院心療内科医師・東邦大学医学部教授)

新しいお薬を作る時には動物で試験をし、その後何段階も試験を繰り返して、さらにヒトに対して用量を検証する試験をして、公式の使用量が決定していく。

知り合いの仲間から、40歳代の主婦の方の診察依頼があった。高血圧で仲間のクリニックに長くおかけの方である。

彼女は、両親が亡くなり、ご兄弟と相続について相談することになった。三等分にするばいい

と思っていたが、受け入れられず、弁護士さんをお願いする状況になってしまった。

この件で体調を崩し、かかりつけ医の彼に相談し、いわゆる安定剤をもらった。しかし薬が合わず、種類を変えたり量を減じたりしたが、うまく調節できないので、心療

いた。薬に敏感なよつた。仲間が使った薬は無難に選択された薬だった。介入は適切で、心療内科としての提案がすぐに思い浮かばない。

彼女は今までスポーツ選手として活躍し身体には自信があり、悩みも身体を動かすことによつて処理できてきた。彼女に